

イルカの博物館

murakami

イルカの博物館

手にした地図を見ながら歩いていくと、ケヤキ並木の先に「イルカの博物館」があった。

三つ葉形のアーチをくぐると、受付に制服を着たイルカが立っていた。

「ようこそ、いらっしゃいませ」

僕は、2、3度まばたきをしてしまった。

「博物館って・・・」

「はい、そうです。わたしたちの博物館です」

イルカの泳いでいる水族館じゃないらしい。

「さあ、どうぞ」

イルカは僕の前を歩き出した。

扉が開かれた瞬間、ぱっとあたりが輝いた。

通路の両側に並ぶガラスケースの中に展示されているのは“星”だった。どれもそれほど大きくはないけれど、不思議な色で輝いている。

「これはみなみのうお座のかけらです。となりの赤いのが、オリオン座のペテルギウスのかけらです」

イルカは星を指差すと順番に説明してくれた。

「春風の強い日でしたので、拾ってくるのに苦労したものです」

「どうやって、拾うんですか？」

僕の質問にイルカは嬉しそうに目を細めた。

「網ですくのです」

「網で？」

「はい。星専用のすくい網です。上にありますので、一緒に参りましょう」

イルカは、ひょこひょこ階段をあがっていった。

2階の展示室には、すくい網でなく夜の海の写真もからざられていた。

「海には、毎晩、幾千個もの星のかけらが落ちてくるのです。そのままにしておけば、それは海のそこにおちて、サンゴになってしまいます。そこで、わたしたちは話し合ひまして、ここに展示することにしたのです。たくさんのかたに見てほしいと思ひましてね」

だけど、今日のお客は僕だけらしい。

イルカは僕の顔を見るところを言った。

「ここの場所は少しわかりにくのかもしれませんがね」

僕はおみやげに青い星のキーホルダーを選ぶと博物館をあとにした。

『詩とメルヘン』編集長やなせたかし先生のご講評：面白いメルヘンで絵になるのだが、オチがすっきりしない。しかしこのタイトルそのものがギャグと考えると、これでいいということになる。
